

## 2026年度 始業式 校長挨拶

皆さん、改めましてこんにちは。今年度より、長野高校の校長として着任いたしました佐野浩一郎と言います。よろしくお願いいたします。

さて、皆さん、昨年度一年どのような年であったでしょうか。皆さんの表情から、その総括をし、本年度、また気持ちをリセットし、新しい年度の始まりに対する期待と、緊張を感じます。2026年度の始業にあたり、校長として皆さんに心からのエールを送ります。

せつくなので、3月まで勤務していた、高校再編関連の話をします。長野県の人口減少の実態を知っていますか。この春、中学生を卒業した生徒数は、17,587人でした。15年後では、どうでしょう。令和22年、西暦だと2040年の出生者数は、10,261人です。実に58.3%まで減ります。約4割減です。君たちがバリバリ働いている35.6歳のころ20歳頃の社会人になる数がそこまで減るということです。長野県はどのような地域社会・世の中になっているのでしょうか。事務系職の人が、AIによって要らなくなって、逆に理系人材が不足するというデータも出ています。よく、予測のつかない世の中と言っていますが、本当に、もうすぐその時代が到来します。自分で判断をし、臨機応変な対応ができる力を養っておかなければ、その時、生成AIのいうままに動く人間ロボットになってしまいます。

話しは変わって、皆さんも授業や報道等で耳にしていると思いますが、これからの学びを方向づける新しい学習指導要領が検討されており、中央教育審議会から今年度中に答申がされ、来年度、告示予定となっています。その中では、「多様な一人一人の可能性を引き出すこと」という内容が強く打ち出されています。そこでは、これまで以上に、個々の興味や関心、得意なこと、学び方の違いを生かす「個別最適な学び」と、互いに学び合う「協働的な学び」が重視されています。しかし、このような学びは、ただ制度や仕組みを整えるだけで実現するものではありません。

多様性を生かす教育の前提となるのは、学ぶ姿勢と私たち一人一人の心の在り方です。考え方や感じ方、価値観、得意・不得意は、人それぞれ異なります。自分と違う意見に出会ったとき、思うように結果を出せない仲間を見たとき、あるいは自分自身が迷いや不安を抱えたときに、互いを排除するのではなく、受け入れ、認め、許容しようとする寛容さが、学びの質そのものを大きく左右します。

中世の終わりから近代初期の頃の人物で、フランスの思想家・哲学者ミシェル・ド・モンテーニュという人がいます。彼の言葉の中で「他人の考えが自分と違うからといって、それを誤りだと思い込んではいけません。」というものがあります。彼は、人間をこ

う捉えました。誰もが偏見をもつ。誰もが間違ふ。自分の考えも絶対ではない。だからこそ、先ほどの言葉が発せられました。しかし、モンテーニュの寛容は、「何でも許す優しさ」ではありません。寛容とは「無知を自覚する勇気」だとし、自分の理解には限界がある。世界は自分の見方だけでは測れない。と自覚することが、寛容の出発点だと考えました。「確信しすぎる人ほど、他者に対して不寛容になる」として、思い込みの怖さを説き、「分からない」と言える強さを育てることに重きを置きました。

この学校は、意欲も能力も高い者同士が集う学校だと私は考えています。しかし、だからこそ、競争が過度になれば、知らず知らずのうちに、他者への想像力を失ってしまう危険性があります。私が、目指して欲しい学校は、競争の中で誰かが孤立する学校ではなく、互いの違いを尊重しながら、高い目標に向かって切磋琢磨できる学校です。

学年が上がるにつれ、皆さんは次第に、自分で問いを立て、自分で選択し、その結果を自分で引き受ける場面が増えていきます。そのときに必要なのは、知識や技能だけではありません。他者と共に学ぶ力、違いを価値として受けとめる力、そして自身自身の未熟さをも認める勇気です。

人として、謙虚さと寛容さと責任を持って、そして三年生、受験学年となる皆さんには、自分に厳しくあると同時に、他者にも、そして自分自身にも許容ある眼差しをもって、この一年に向き合ってほしいと思います。

高校生活は、振り返れば驚くほど短い時間です。しかしその一日一日は、皆さんがどのような学び手となり、どのような人間として社会に出ていくのかを形づくる、かけがえのない時間でもあります。どうか今年度、「自分はこの学校で、どのように学び、どのように他者と向き合ってきたのか」を、胸を張って語れる一年にしてください。今年が、皆さんにとって、知的にも人間的にも実り多い一年となることを願い、始業の挨拶とします。

令和8年4月3日 始業式にて

学校長 佐野 浩一郎